

## 谷川士清自筆本倭訓栞の掲出語の排列について

平井 吾門

○ はじめに

伊勢の国学者・谷川士清（二七〇九〜一七七六）によって編纂が始められた『倭訓栞』は、初版刊行から最終的な完成までには一一〇年の時を要しており、実証的立場から二万弱の見出し語に語釈を加えた本格的な五十音引き国語辞書として、近代国語辞書の成立に大きな影響を与えたことが知られている。一般には、（不正確ではあるが）「日本初の五十音引き国語辞書」といった評価がなされ、版本や活字本の流布によって今日まで広く使用されてきた。

従来の研究は版本や活字本が中心であり、自ずから求められる情報には限界があった。しかし、その存在だけが知られていた自筆本の影印が刊行されたことにより、『倭訓栞』研究は今新たな局面を迎えている。士清の没した翌年から刊行が始まった『倭訓栞』は、その使用実態に比して、編

纂の契機や初期構想などに関して未解明の部分が多い文献であり、自筆本の存在は士清生前の編纂意図を探るものとして極めて重要である。自筆本については、書誌情報などが三澤（二〇〇六a）によって詳らかにされている。その一方で、起稿年や成立年の特定を含めて、本格的な調査は未だ模索段階にあると言えよう。

『倭訓栞』は、見出しの部立てだけではなく、第二音節までを五十音順で排列するのが大きな特徴である。整版本冒頭の「凡例」はもちろんのこと、その前段階である自筆本冒頭に書かれた「総論」の中にも、「此書五十音をもて次第し後のいう／江を省きぬれば四十七條を立たり各／條の下もまた五十音の序てによれり／捜覧に便あらしめんかため也」／（は改行）と書かれている。しかし、自筆本の本編を見てみると、実際には第二音節以降の排列は五十音順にはなっておらず、無秩序に並べ立てられたような状態が見て取れる。「総論」は、「あ」部「い」部と同じ冊に綴じら

れており、ひとまず完成品として製本されているにも拘わらず、同じ巻の中で最初から矛盾が生じている状態にある。

それでは自筆本の排列はどのようになっていたのか、ということが問題になってくるわけであるが、各項目を排列に注意しながら眺めてみると、五十音順にはなっていないものの、完全に無意味かつ無秩序に並ぶわけではないのではないかと思われる。本稿では、自筆本掲出語の排列に関してわずかながら見出せる傾向を示す。その上で、どのように収録語彙が増やされていったのかという点について、自筆本における初期構想の解明につながる一試案を論じた。

## 一 先行研究

『倭訓栞』の排列に関しては、「凡例」に示される通りの排列であるためか、本格的な調査の対象とはなっていない(注二)。また、自筆本の研究は始まったばかりであり、排列に関して真正面から研究しているものも未だ見ない。ただし、五十音順による排列は『倭訓栞』の大きな特徴であるため、それ自体は『倭訓栞』に触れた研究で言及されることがある。

北岡四良氏は「和訓栞成立私考」(一九六八)の中で、『倭訓栞』が掲出語を五十音順に並べた理由として、「五十音順

を重要視する傾向が、国学者の間に高まつてきた為に、語彙配列の準拠はそれによつたとも推測される」と指摘している。さらに、『倭訓栞』編纂の過程に関しては次のように述べる。

恐らく土清の草稿の時、五十音に分け、第二音節まで分類した標語の冊子に紙片をカード式に貼つていったか、又は冊子に直接に記入して編纂しつづけたものと思ふ。

また、三澤薫生(二〇〇六a)では、自筆本の掲出語の排列が整理されていないことを指摘した上で、起稿時期の特定によつては自筆本を初稿本と見なし得る旨を論じている。三澤氏は、欄内外に増補される自筆本の様子から『倭訓栞』(の語彙収集)におけるカード使用は原則としてなかったと判断しておきたい」と述べるが、「手控えとなる冊子のようなものは用意していたのではないか」としており、北岡氏同様、自筆本以前に雑多な手控えがあつたことを示唆する。

## 二 土清と五十音排列

先行研究を踏まえて、整版本『倭訓栞』掲出語の排列に関して、なぜ五十音順が採用されたのかを考察しておく。

大著『日本書紀通証』に於いて、土清は本邦初の五十音図による動詞活用表と言われる「和語通音」を示している。

ほぼ同時期には、賀茂真淵も五十音による倭語の研究を行つており、土清の研究成果も含めて、本居宣長以降の研究へと連なっていくことになる。近世初期、契沖などによつて悉曇学で用いられた五十音図の概念が国学者の間に流入して以来、日本語を学問として捉えたときに五十音は切り離せない状況だったのである。

土清は『倭訓栞』に五十音順を用いた理由として、「搜覧に便あらしめんかためなり」と述べている。単に単語検索の便を考えただけであるならば、節用集などでも当時広く用いられたイロハ順を採用することも出来るが、土清はイロハ順に関して「総論」内で以下のように述べる。

いろはは涅槃經諸行無常の四句の偈を譯して同字なしの長哥よみなし七字つゝ句ぎりして陀羅尼にならずらへぬ韻字にとかなくてしすと置るも偈の意成へし是は弘法の其徒を導けるものならし五十音のいうえを省きて歌の詞に属り四十七言をもて假字つかひを示せるは古今獨歩の妙作千字文の及ふ所にあらずされと世の人を教ふるの法としかたし古今集に同じ文字なき歌もあれとたゞ浮世のさまをのへて一事に偏也

続けて、五十音に関して以下のように述べる。

さて我邦にて古今に涉り四方に通してものならふ始めの法と定むべきは五十音にしくはなかるへしいつれの道にもかたよらずたゞ取に随ひて其用をなせり倭語をあつかふ模範訓義をさはくの規矩他に求むべきものにあらず

そして「総論」は、この後、五十音(図)の持つ意味を懇

々と説くことになる。

土清にとつて、『倭訓栞』は自身の研究の総決算であり、晩年の一大事業であつたが、その中で五十音順による排列は、簡便さの追求だけではなく学問的な立場としても欠かせない物であつた。また、『倭訓栞』の語釈では語義説明に仮名反切を多用しているため、五十音を排列に使用することで読者に意識付け、自説の説得力を増す狙いもあつたのではないか。さらには五十音順(或いは五十音図)について啓蒙的な意味合いもあるとすれば、『倭訓栞』の想定読者層の解明にもつながる問題として捉えることが出来るため、いずれ稿を改めて論じたい。

### 三 自筆本の排列及び考察

自筆本『倭訓栞』は、未確定ながら、三澤(二〇〇六a)によつて宝暦二(一七五二)〜九年辺りに起稿・脱稿された可能性が提示されている。用箋に引かれた野線内部に本文が書かれるほか、欄外や余白に夥しい増補がなされている。この野線内部に書かれた本文は、行間を詰め、なおかつ部末に空白頁を少なからず挟んで製本されていることなどから、見出し語の増加は想定されつつも、個々の語釈に関してはある種の完成段階として捉えられていたと考えられる(平井(二〇一〇)参照)。野線内部の本文が成立した



おほみあかし、おほせ」などを挙げる事が出来る。

以下、これらの分類に該当する項目を掲げる。なお、見出し語の所在は複数頁にわたることがあるため、第一番目に現れる見出し語についてのみ示した(丁数は三澤(二〇〇八a)に準拠する)。

- 【あ】部 冊一 全一四五項目
  - 一六オ あな、あや
  - 一七ウ あまら、あまねし
  - 一八ウ あかし、あらし、あられ、あわゆき、あわ、あさぼらけ、あかつき、あき、あさ、あした、あす、あさつて、あぢさゑ、あぬ
  - 二〇ウ あはひ、あひ
  - 二一ウ あかね、あひなひ、あふひ、あゆひ、あひおひ
  - 二二ウ あかむ、あかぬさす
  - 二三ウ あからさま、あからめさす
  - 二四ウ あまがつ、あまのたくなは(擦り消し)
  - 二五ウ あまが、あまつ
  - 二七ウ あじか、あしか
  - 二八ウ あしを、あしつを
  - 三〇ウ あをうなはら、あをのり
  - 三一ウ あくた、あがた、あがつ、あがむ
  - 三四オ あさわらふ、あさける
- 【い】部 冊一 全二〇一項目
  - 三七ウ いにしへ、いま、いまだ
  - 三八オ いは、いはほ、いはふ
  - 三九ウ いはむ、いそく
  - 四〇ウ いろは、いろはと、いろね、いろくつ
  - 四一ウ いはつな、いはなし、いはくみ、いはむ、いはゆ
  - 四二ウ いとま、いとむ、いとこ
  - 四三オ いちが、いちがやし、いちぐら、いちご、いちひ
  - 四四ウ いが、いがは、いがかる、いかり、いかた、いがむ、いがはし、いがひ
  - 四四ウ いたはる、いたづらがはし、いたづら、いたどり、いたち、いたづき、いたづら

- 【え】部 冊二 全一八項目
  - 一四オ えびら、えびす、えみし
- 【を】部 冊二 全七三項目
  - 七オ をとめ、をのこ
  - 七ウ をとつ、をととし
  - 八オ をさめ、をさおさし
  - 八ウ をち、をは
  - 九オ をみ、をちなし、をちこち、をちかた
  - 一〇オ をか、をみな、をんなめ
  - 一〇ウ をか、をがむ、をかす
- 【か】部 冊二 全一四八項目
  - 三一オ かひ、かがひし
  - 三二ウ かみ、かがみ
  - 三三ウ かかみ、かかどり
  - 三四ウ かだし、かしたで
  - 三五オ かせぎ、かせつゑ
  - 三六ウ かたぶく、かたき
  - 三七オ かたき
- 【う】部 冊二 全九一項目
  - 五〇ウ うらみ、うら
  - 五一ウ うづき、うらふづき、うるふ
- 【い】部 冊二 全一八項目
  - 五二ウ いな、いなばのくも
  - 五三オ いな、いなば
  - 五四ウ いま、いますがり
  - 五五ウ いま、いますがり
  - 五六ウ いま、いますがり
- 【せ】部 冊二 全一八項目
  - 五七ウ せのたま、せのたま
  - 五八ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 五九ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 六〇ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
- 【い】部 冊二 全一八項目
  - 六一ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 六二ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 六三ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 六四ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 六五ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 六六ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 六七ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 六八ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 六九ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七〇ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七一ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七二ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七三ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七四ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七五ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七六ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七七ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七八ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 七九ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八〇ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八一ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八二ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八三ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八四ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八五ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八六ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八七ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八八ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 八九ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九〇ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九一ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九二ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九三ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九四ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九五ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九六ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九七ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九八ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 九九ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか
  - 一〇〇ウ いはと、いはせき、いはわだ、いはとかしは、いはかき、いか

三八オ かいねり、かいなで、かいまみ  
 四二オ かげろひ、かかげ  
 四三オ かたなら、かさから  
 四四オ かつら、かねる、かねて  
 四五オ かねる、かねて

【き】部 冊二 全四四項目  
 五〇ウ きぬ、きそ  
 五一オ きぬ、きぬきぬ  
 五三ウ きは、きはむ

【く】部 冊一 全一二〇項目

五八ウ くる、くるべき  
 五九ウ くつ、くつわ  
 六〇ウ くひ、くひぢ  
 六一オ くま、くまぢ  
 六二ウ くちをたく、くちつづみ  
 六三オ くさり、くさづり  
 六四ウ くそ、くそわたぶくろ  
 六五オ くはふ、くはだつ、くはし  
 六六ウ くちびる、くちさのかう  
 六七ウ くちせる、くちをけす、くちこはし

【け】部 冊三 全三九項目  
 一ウ けふり、けふけさ  
 一オ けはれ、けがれ

【こ】部 冊三 全九九項目

九ウ こよみ、ことし、こしかた  
 一〇ウ こころおきて、こころばえ、こころばせ  
 一一ウ ころ、ころなひ  
 一二ウ こしき、こじる、こじける、こじ、こじり  
 一三ウ こし、こむら、こがみ  
 一四ウ こうをへる、こうにとる

【さ】部 冊三 全七八項目  
 二七オ さざれいし、さざなみ  
 二九オ さいとり、さいたて、さいつころ、さいづち、さいなむ  
 三五ウ さきがけ、さきて

【し】部 冊三 全一〇項目  
 三九オ しぐれ、しも、しもつき、しはす  
 四〇ウ しひな、しひね  
 四一ウ したふ、したろ  
 四二ウ しらつち、しらろ  
 四三オ しらなみ、しらたま  
 四四ウ しほひ、しをる、しをり  
 四五オ しま、しまわ  
 四六ウ しりむ、しだられ、しじみ  
 四七ウ しりうたげ、しりさや  
 四八オ しれる、しれもの  
 四九オ しぶる、しぶく

【す】部 冊三 全四七項目

一〇ウ すがる、すがら  
 一一ウ すなはち、すな  
 一二ウ すく、すくふ  
 一三ウ すさみ、すさまし  
 一四ウ すずぐ、すずめ  
 一五オ すみ、すみき、すまき  
 一六ウ すはえ、すはやう

【せ】部 冊四 全二九項目

二〇ウ せま、せまのは  
 二一ウ せうと、せう、せうそこ、せと、せこ  
 二二ウ せむ、せむのは  
 二三ウ せうと、せう、せうそこ、せと、せこ  
 二四ウ せま、せまのは  
 二五ウ せうと、せう、せうそこ、せと、せこ

【そ】部 冊四 全項四八目

七ウ そとも、そむく、そびら  
 八ウ そほつ、そほつ、そほき  
 九ウ そそ、そそき  
 一〇ウ そねむ、そしる  
 一一ウ そへ、そふ  
 一二ウ そる、そり、ぞり

【た】部 冊四 全一〇項目

一四ウ たたかひ、ただぐり  
 一五ウ たな、たなはたつめ、たなびく  
 一六ウ たましひ、たがひ、たのこひ  
 一七ウ たびら、たびら  
 一八ウ たかみ、たかんな  
 一九ウ たかみ、たかんな





五〇ウ めうじ、めうだい

【も】部 冊六 全五六項目  
五三ウ もちつき、もちひ

五五ウ もんども、もひ  
五七ウ もやもや、もやひ、もたひ、もだへる

五八ウ もと、もとむ  
五九ウ もとほる、もとむり、もとほりあそび、もとほし

【や】部 冊七 全六六項目  
一ウ やいほくき、やいくし

二ウ やまひ、やまぶき  
三ウ やさき、やはぎ、やつかれ、やつさし

四ウ やしほおひ、やしほ  
五ウ やうか、やうやく

六ウ やなぎ、やなくひ  
七ウ やせさらばふ、やせとほる

【ゆ】部 冊七 全四四項目  
一ウ ゆふだち、ゆき

二ウ ゆふつづ、ゆふべ  
三ウ ゆひ、ゆはた

【よ】部 冊七 全四八項目  
一ウ よる、よべ、よひ、よる

二ウ よろひ、よほひ、よぼひ  
三ウ よし、よろし

四ウ よもつづく、よもぢがへり  
五ウ よもつご、よもぎき、よろぼき

【ら】部 冊七 全一二項目  
一ウ らちあく、らちもなし

【り】部 冊七 全九項目  
一ウ りつしんべん、りつしん、りつぱ

【る】部、【れ】部、【ろ】部は該当項目なし(各々六・七・六項目)

【わ】部 冊七 全五八項目  
三六ウ わいしく、わいためなし

三七ウ わがせも、わがせもこ  
三九ウ わがせも、わかゆ、わかき、わかきをつま、わかれの

四〇ウ わがせも、わかゆ、わかき、わかきをつま、わかれの

【ゐ】部 冊七 全一八項目  
四二ウ ゐざし、ゐぐひ

【ゑ】部 冊七 全二〇項目  
四四ウ ゑがほ、ゑまひ、ゑむ、ゑくぼ

【お】部 冊七 全一六五項目  
五〇ウ おほぬ、おほいおほともひ

五一ウ おもほてり、おもねり、おもへり  
五二ウ おぼろ、おぼろけ、おほよそ

五三ウ おほほそみ、おほつかなし、おほほし、おほどち、おほど

五四ウ つぼ、おほとこ、おほちかふぐり、おほまわ、おほかみ、おほ

五五ウ きんたのつかさ、おほゆみ、おほみち、おほみあかし、おほ

五六ウ おとせ、おとなひ、おどろ、おどす、おどろく、おとなふ、

五七ウ おりある、おとる、おとる、おとる

五八ウ およづきことおよひ  
五九ウ おくむもの、おくものいる

六〇ウ おしぬ、おしくさ、おしまつき、おして

六一ウ おもとひとまろきみ、おもかけ、おもだか、おもづら、お

六二ウ おこなひ、おごりのり、おごしごめ、おもひやる、おもしろし

六三ウ おほいまうちきみ、おほきおほいまうちきみ、おほまつり

六四ウ

六五ウ

六六ウ

六七ウ

六八ウ

六九ウ

ことひと、おほいしかすつかき  
六一ウ おもひで、おもひ

このように、全体的には不統一ではあるものの、隣接する多くの項目が有機的につながっていることが分かる(注三)。第二音節が共通している場合、二つの見出し語だけが揃っていてもそれは偶然かも知れないが、一〇以上の繋がりを見せる場合、意図的に繋がたと考える方が自然である。そう考えると、二つの繋がりであっても、意図的なものの可能性が出てくるわけである。

このような繋がりを見せるのは、多くの見出し語が「連想」によって紡ぎ出されたからではないだろうか。語彙収集の段階では、典籍からの語彙の書き抜きをするだけにとどまらず、より多くの語を思いつく必要がある。典籍から抜き出したある語について語釈を加えた段階で、連鎖的に他の語を思い描き、それについての記述を重ねていく。そういう行爲の結果が、このような排列を生み出したと言える。

見出し語同士の繋がりが無いと思われる箇所の方が多いのは、語彙収集のために抜き書きする合間合間に、連想的に繋がった見出し語が続くからだと考えたい。

#### 四 問題点

自筆本の排列を探ると、以下のような問題点が浮かび上がってくる。

##### ① 排列の変更について

自筆本本文の中で、「いたづがはし」「しく」「やつす」「おほほし」の各項目には、「上と義通へり」「上に同じ」といった語釈が付く。この「上」は、各々直前の項目のことを指すと思われる。例えば「しく」の場合、自筆本では

しきり 仍字頻字をよめり繁をも重なるをもしき  
とよめり意通ふなるへし  
しく 敷をよめり上と義通へり

となっており、さらに整版本を見ると

しく 多くの辭につけていへり重字の義也○敷  
をよめり重仍と意通へり(後略)

のように具体的に記されている。「しく」の場合は前の項目「しきり」と前後関係が変わらず、整版本になっても間に別項目が挿入されることはない。しかし、「いたづがはし」では、自筆本の「いたはる、いたづがはし、いたづき」という順番が整版本では「いたづき、いたはる、いたづがはし」の順番になり、さらに「いたはる」と「いたづがはし」の間には六つの項目が挟まっている。そのため、語釈で「上」と同様である旨を示してもズレが生じてしまう。整版本では

いたづがはし 煩をよめりはし反ひかひ反きなれ

はいたづきに同じ

という説明に変更されている。ただし、自筆本における「いたづがはし」の「上」の項目は「いたはる」であり、「いたはる」と「いたづき」が「勞」を語義に含んで意味的に繋がりはするものの、「示すものが変わっている。後の排列の組み替えを想定していれば、このような記述にはならなかっただろう。この点からすると、自筆本の起稿段階では、士清は第二音節以降の排列にはこだわりを見せていなかったのではないかと考えられる。

## ② 擦り消しについて

本文には多くの増訂が為されているが、本文を擦り消して上書きする場面がある。本文に干渉しない増訂が大半の中で、擦り消し部分は、うっすらとは読めるものの、完全には解読したい状態になっている。項目自体が擦り消されたものに関して、排列の観点から、前後の項目との関係を確認してみる。

「あちきなし」という項目は、「あからめさす」を擦り消して上書きしている。もともと「あからめさす」には四行の語釈が付されていたが、「あちきなし」の語釈は三行であり、残りの一行には「あつかふ」が上書きされている。「あつかふ」の語釈は四行であり、最初の一行だけが上書きされた状態になっている。すなわち、この箇所は本文を書い

ている段階で擦り消し、そのまま記述を続行したことが分かる。擦り消された「あからめさす」の前項は「あからさま」であり、音形的な流れとしては「あからめさす」の方が良い。しかし「あからめさす」はそれ以前にほぼ同じ内容で立項されており、連想で紡いでみものの重複に気付いたために抹消されたと考えられる(注四)。

一方、「しらみ」では、二行にわたる語釈の後半を消し、二行目に「しの」を入れている。「しらみ」は該当箇所にはないため、消された部分の語釈は少なくとも本書からは導き出せなくなっている。なぜ、小書きや訂正線による増訂ではなく、完全な消去を選んだのか不審である。「しのみ、しらみ、しぐれ」と続く中に、「しらみ」の本文を消して「しの」を入れねばならなかった理由は、なお検討が必要である。

「したひ」の項目では、「したむ」が上書きされているが、行の末尾が二列に小書きされているのが特徴的である。自筆本では、増訂前の本文は、原則として罫線で仕切られた行をはみ出さず、なおかつ一行に一列を収める体裁が守られている(注五)。通常は、たとえ二文字収めるためであっても改行しているが、ここでは三文字が無理矢理詰め込まれている。これは既に稿が成って改行出来なかったためであり、この箇所は後の増訂であると言える。「したむ」の前後の項目は「しとけなき」と「しらき」であり、「したひ」「した

む」ともに、音や形や意味上の繋がりは見い出せない。

同じ擦り消しによる本文の訂正であっても、本文執筆段階と、本文執筆後の二段階で為されている様子が分かる。後者は当然排列の問題に大きな影響を与えるが、今後の課題である。

## 五 まとめ

士清は、『倭訓栞』編纂において、『日本書紀通証』を始めとした研究成果を基礎としつつ、新たに多くの語を収集している。その過程で、多くの「連想」を駆使しながら、語彙を拡大させていった様子が見受けられる。

ただし、この自筆本に見出し語を列挙しながら、そのたびに古典籍を調査して語釈を加えていったとは考えられない。手控え(冊子或いはカード)に、思いつくままに原案を書き連ね、ある程度の語が集まったところで、ひとまず書籍の形にまとめようとしたのであろう。弟子や知人に稿を披露すると共に、校閲を頼むためでもあったと考えられる。書籍の体を為すために本文は行間を詰めており、執筆中に訂正の必要に駆られた場合には、本文を擦り消して上から別の項目を重ね書きすることもあった。

語彙に広がりを持った手控えだが、清書する段階では排列のことは決まっていなかったため、「連想」によって紡が

れた排列がそのまま踏襲された。部立てを五十音順に並べるのは当初の想定通りであろうが、第二音節も五十音順に排列するというのは稿を書き終えてからのことである。自筆本の増訂法には小書きや見せ消ち、擦り消しなどがあり、本文と注記の先後関係も合わせて逐一慎重に検討し直す必要があることも分かったので、今後の調査に俟ちたい。

## (注)

- (一) 第三音節以降を含めた排列に関しても、「モーラの短い見出しが先になる」といった傾向はあるが、具体的には調査が必要である。
- (二) ここでは隣接したものを列挙したが、「●▲○○」「●○○」「●▲○○」「●○○」のように、一つおきに似通う見出し語が並ぶことも少なくない。連想するという観点からすれば、必ずしも隣接している必要はなく、近接している場合も考察対象となり得る。しかし、その範囲は必ずしも明確ではないため、今回の調査では除外してある。
- (三) 大まかな傾向ではあるが、モーラ数の多い見出し語が部末に固められる様子も全体を通して見られる。
- (四) ただし重複しても消されていない例もあるので、さらなる考察が必要である。
- (五) 短歌一首を丸ごと引用する場合は、すべて一行に収めるという上位の原則があったようであり、短歌に関しては同一行内で二列にわたって詰め込まれているところが多い。

## 〈主要参考文献〉

- 青木 伶子(一九八七)「倭訓栞と和字正濫鈔」(山田忠雄編『国語史学のために 第三巻 語誌・語史』)  
赤堀又次郎(一九〇二)『国語学書目解題』(吉川半七)  
大川 茂雄・南 茂樹(一九〇四)『国学者伝記集成』(大日本図書)

大野 晋・大久保 正編(一九九三)『本居宣長全集別巻三』(筑摩書房)

尾崎知光編(一九八四)『和訓栞 大綱』(勉誠社文庫 一一一)

加藤 竹男(一九三四)『国学者谷川士清の研究』(湯川弘文社)

加藤 竹男(一九三九)『国学史上に於ける谷川士清の地位』(『国語と国文学』一六一〇)

北岡 四良(一九六八)『倭訓栞成立私考』(『皇学館大学紀要』六)

北岡 四良(一九六九)『続倭訓栞成立私考』(『皇学館大学紀要』七)

北岡 四良(一九七二)『士清と宣長』(『皇学館大学紀要』一〇)

北岡 四良(一九七五)『谷川士清覚書』(『皇学館大学紀要』一三)

後藤 一日(一九八三)『鯉屑譚の辞書的価値』(『国学院雑誌』八四・三)

篠崎 久躬・浦上 正明(一九七四)『倭訓栞後編』の諸国方言索引(『近代語研究』四)

竹内 令(二〇〇八)『近代国語辞典の祖谷川士清』(私家版)

田島 優(一九九九)『倭訓栞』に見られる『物類称呼』の影響(『同朋文学』二九)

谷川士清先生事蹟顕彰会(一九一一)『谷川士清先生伝』(大日本図書)

東条 操(一九三五)『倭訓栞後編の方言』(『国語と国文学』一一・九)

平井 吾門(二〇一〇)『倭訓栞』研究の課題と展望(『日本語学論集』六、東京大学国語研究室)

馬淵 和夫(一九九三)『五十音図の話』(大修館書店)

三澤 成博(二〇〇四)『和訓栞』の方言資料『南留別志』について(『和洋国文研究』三九)

三澤 成博(一九九五)『和訓栞』の版種小考(『和洋国文研究』三〇)

三澤 成博(一九九六)『整版本『和訓栞』と翻刻本『和訓栞』』(『和洋国文研究』三二)

三澤 成博(一九九八)『和訓栞』所引の下学集について(『語文(日本文学)』一〇〇)

三澤 薫生(二〇〇五)『和訓栞』原本の復元(一) 見出し項目について(『和洋女子大学紀要』(人文系編) 四五)

三澤 薫生(二〇〇六a)『谷川士清自筆『和訓栞』について』(『和洋国文研究』四二)

三澤 薫生(二〇〇六b)『和訓栞』原本の復元(二) 見出し項目について(『和洋女子大学紀要』(人文系編) 四六)

三澤 薫生(二〇〇七a)『もう一つの『和訓栞』稿本』(『和洋国文研究』四二)

三澤 薫生(二〇〇七b)『和訓栞』原本の復元(三) 見出し項目について(『和洋女子大学紀要』(人文系編) 四七)

三澤 薫生(二〇〇八a)『谷川士清自筆倭訓栞 影印・研究・索引』(勉誠出版)

三澤 薫生(二〇〇八b)『河北景横筆、谷川清逸書写『和訓栞』稿本について』(『和洋女子大学紀要』(人文系編) 四八)

三澤 薫生(二〇〇八c)『和訓栞』に見る谷川士清見聞の記事(『和洋国文研究』四三)

湯浅 茂雄(一九九七)『言海』と近世辞書(『国語学』一八八)

湯浅 茂雄(二〇〇二)『訂正増補 和英英和語林集成』和英の部の増補と『和訓栞』(『雅言集覧』『官版 語彙』(『国語学』五三))

吉崎 久(一九七五)『鯉屑譚』小考(『皇学館論叢』八三)

三重県教育会(一九四二)『郷土三重』

(ひらい) あもん 大学院人文社会系研究科 博士課程(三年)